

新水稻奨励品種「にこまる」の特性

～高品質・良食味と多収性を併せ持つ晩生品種～

1. はじめに

近年、夏季が高温で推移することにより白未熟粒の発生が助長され、玄米外観品質の低下が問題となっている。和歌山県の晩生の主力品種「ヒノヒカリ」でも白未熟粒の発生が多発しており、検査等級を下げる主な原因となっている。そこで、夏季の高温による白未熟粒の発生が少なく、外観品質に優れる品種として、「にこまる」が2017年2月24日に和歌山県水稻奨励品種に採用された。

2. 「にこまる」の来歴

「にこまる」は九州農業試験場水田利用部育種研究室（現九州沖縄農業研究センター筑後研究拠点稲育種ユニット）において、高温気象下でも高品質・良食味と多収性を併せ持つ新品種の育成を目標に選抜・育成され、2005年に「にこまる」と命名された。和歌山県では2011年より奨励品種決定調査において試験を開始し、特性を把握してきた。

3. 「にこまる」の特性

「ヒノヒカリ」と比べ、稈長はかなり長く、穂長は並で穂数は少ない。耐倒伏性は「ヒノヒカリ」と同程度である。出穂期は3日程度、成熟期は5日程度遅く、本県では晩生に属する。草型は中間型で、稈の太さは中である。いもち病真性抵抗性遺伝子型はPia、Piiを持つと推定され、葉いもち圃場抵抗性はやや弱、穂いもち圃場抵抗性もやや弱であると考えられる。縞葉枯病抵抗性は罹病性である（表1）。高温登熟性は中、高温寡照耐性は「ヒノヒカリ」より明らかに優れる。

表1 「にこまる」の特性表

品種名	両親の組み合わせ	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	草型	脱粒性	穂発芽性	耐病性				耐倒伏性	玄米収量 (kg/a)	玄米千粒重 (g)	品質	採用年次
										穂いもち	葉いもち	縞葉枯	紋枯					
にこまる	きぬむすめ×北陸174号	8.28	10.09	88.7	17.5	306	中間	難	中	やや弱	やや弱	罹病性	中	やや強	53.9	23.6	上中	平成29年
ヒノヒカリ	黄金晴×コシヒカリ	8.25	10.04	81.6	17.9	344	偏穂数	難	難	やや弱	やや弱	中	中	やや強	52.2	22.3	上下	平成5年

注) データは農業試験場の奨励品種決定調査(2011～2016年)の平均値。移植期は6月16日。

「ヒノヒカリ」と比べ収量は高く（図1）、白未熟粒の発生が少なく（表2）、玄米外観品質が優れている（図2）。

表2 「にこまる」の白未熟粒発生程度

品種名	白未熟粒(0-5)				
	心白	乳白	基部未熟	背白	腹白
にこまる	0.5	0.1	0.1	0.0	0.1
ヒノヒカリ	1.7	0.6	0.6	0.2	0.0

注) データは奨励品種決定調査(2012～2016年)の平均値
心白、乳白、基部未熟、背白、腹白の発生程度は、0(無)～5(甚)の6段階

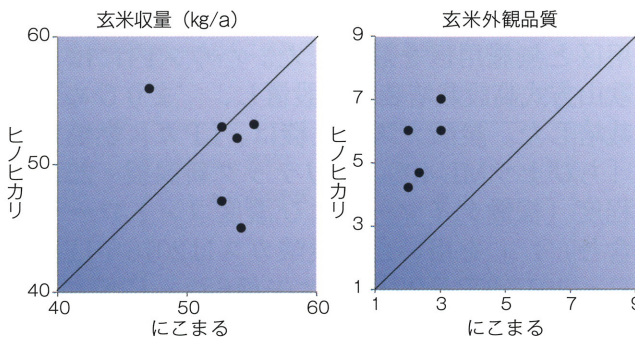


図1 「にこまる」と「ヒノヒカリ」の収量比較

注) 2011～2016年の年ごとの収量

図2 「にこまる」と「ヒノヒカリ」の玄米外観品質比較

注) 2011～2016年の年ごとの玄米外観品質
玄米品質は玄米の外観品質について1(上上)～9(下下)の9段階評価

4. 栽培上の注意点

「にこまる」の適地は県北部、県中部の平坦地と考えられる。いもち病にはやや弱いので適期防除に努める。苗の伸長や初期生育が旺盛な場合、徒長気味になることもあるので、やや低温で育苗管理し、本田での初期生育が過大にならないように管理する。「ヒノヒカリ」より熟期が遅いので、標高の高いところでは作付けしない。平坦地においては極端な晩植は避ける。

(栽培部 宮井良介)